

エー
A G 5 だより
ジー
ファイブ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

青島日本人学校と大連日本人学校の取り組み

青島日本人学校校長 金森孝子
大連日本人学校 教員一同

金森孝子氏

青島日本人学校は、今年度から中期目標を「多様性を理解し、自他を尊重しながら切磋琢磨する児童生徒の育成」と改定し、グローバル人材、特にバイカルチュラル人材の育成を要としてその具現化に努めています。また、AG5の取り組みを開始し、台湾3校の実践を参考にしながら、日本語指導のプログラム開発を行うことになりました。

大連日本人学校は、「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」というテーマを設定し、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発に取り組みました。



大連日本人学校 職員一同

青島日本人学校における日本語指導

学校の願い

(1) 児童生徒の実態 本校は青島日本人会が運営する創立十六周年を迎えた学校です。児童生徒は、四割以上が多文化家庭です。その特徴を強みとして、お互いが切磋琢磨できるような中国語にも日本語にも力を入れています。日本語指導は、必要な児童生徒の個別指導を三年間実施しています。しかしその内容については担当が日々模索しており、質の高い指導で一人一人の力を伸ばしていきたい、カリキュラムを構築していきたいという願いをもっていました。また青島には、就学前の幼児を日本語で保育する施設がなく、言語の習得の著しい幼児期を中国語等で過ごしてきている児童が多いことも、日本語指導が必要要因になっています。入学する多くの児童は中国語に慣れ親しんできていますが、多文化家庭では十分に日本語に触れることなく幼児期を過ごしています。学校には入学が可能かについての相談が多く寄せられています。

(2) 在留邦人の減少 現在青島は、在留邦人が一七〇〇人前後で、毎年減少傾向にあります。在留邦人の減少は学校の経営に大きく影響します。減少の要因の一つとして、日系企業が日本人を長期間、派遣するスタイルから、現地の方を管理職とする経営にシフトしていることが挙げられます。本校の児童生徒数は平成二十三年の一一八名をピークに減少し、平成二十七年には七十名を切りました。日本語指導は在籍数が減少し続ける状況を変える手段としても実施せざるを得なかったのです。児童生徒、保護者に選ばれる学校づくりを目指したのです。現在、小学部六十五名・中学部十六名の八十一名の在籍を確保することができています。しかしながら在留邦人の減少は今後も続く見込みで、樂觀視できない状況が続くと思われまます。

日本語指導の実際

日本語指導は、「個別指導」と「課外授業（日本語教室）」を中心に行っています。二期からは、AG5委員の先生方の助言により、教科の基礎基本の定着が図られるよう、在籍学級と日本語教室の指導を関連させた教科指導にも取り組み、効果を上げています。

(1) 個別指導 在籍教室とは別にを行う個別指導は、日本語指導が必要な児童生徒の保護者との連携を密に、



日本語指導担当の岡本教諭による日本語教室での補充、先行授業

時間や回数、担当などを確認しながら実施しています。学年や実態に応じて、日本語指導担当教員と担任が相談しながら、指導を継続できるように調整し、今後の進路選択について共有しながら、ニーズや実態に応じて指導内容を工夫しています。

(2) 課外授業（小学部一年の日本語教室） 今年度から課外授業として小学部一年生対象の日本語教室を新設し、週一回四十五分の指導を行っています。日本語の理解が不十分と把握した複数の新入生に対し、入学前に保護者と面談し、入学後の早い段階で日本語学習に取り組みめるようにしました。

第一回の日本語教室は入学してから一週間後に実施。金曜日六校時、小学部低学年の下校後の学習になるので、集中力が続くか心配しましたが、開始当初から意欲的に取り組む姿が見られました。「みずがのみた

いのです。」「といれにいつてもいいですか。」の復唱で発音を確認したり、「すきなものはなんですか。」の問答を行ったりして、学校生活にかかわる言葉や文を用いて学習を進めました。学びを重ねるにつれ、日本語への興味も増し、「わたし、日本語だすき。」と話す児童も見られるようになりました。三か月を過ぎたころ、児童の日本語力は飛躍的に伸びてきました。学習してきた言葉と文、そして自分の伝えたい気持ちやびつたりと一致するようになってきたことで、自信をもって積極的に学習したり活動したりする様子が増えてきました。

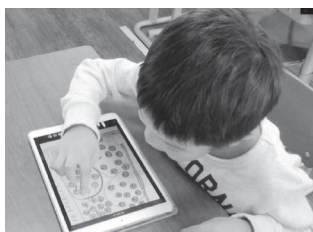
(3) 在籍学級の学習を日本語教室で補充、先行して指導

○国語科単元「じどう車くらべ」

在籍学級では、説明文を読んで構造や内容を把握するという単元目標を達成するために、「じどう車ずかん」づくり」という言語活動を中心に学習を展開していました。そこで、日本語教室では図書資料から車を選び、在籍学級より先行して学習することになりました。児童は日本語教室で学んだことをもとに、在籍学級で自信をもって説明文を書き、振り返りカードに◎をつけていました。

○算数科単元「おおきいかず」

主な単元目標は二位数についての



iPadで楽しみながら数を学ぶ様子

数え方、読み方、書き方、構成についての理解です。一人一人の理解を確実にするために在籍学級の学習を補う取り組みをしました。在籍学級では十のまとまりをつくるのが難しくそうだったので、日本語教室では一人一人に数を唱えさせたり十のまとまりを説明させたりしながら答えを導きだしていきました。在籍学級でも有効だったカードを用いることで作業のつまずきもなくなり、教科書以外の問題にも進んで取り組んでいました。在籍学級の学習を日本語教室で補充することで、着実に目標の達成が図られる形になりました。

今後も

AG5への参加をチャンスととらえ、学校経営や指導面で成果が得られるようにAG5運営指導委員会の先生方や関係校と共に、日本語指導を推進していきたいと考えています。

大連日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成

はじめに

大連日本人学校は、児童生徒の約半数が国際結婚家庭で、両親のどちらかが中国出身の方という場合が多く、互いに認め合い支え合う雰囲気にあふれています。

この特性を生かし、本校では、日本と中国の文化・価値観の違いを捉え、自分の生き方を確立し、生涯にわたってその良さを発揮し続ける子どもの育成を目指して、教育活動を進めています。

児童生徒の実態

(1) 言語能力

日本語力が十分でないために学校生活に支障が出ている児童生徒はごく少数ですが、学習場面でのつまずきが課題となっています。

実際に全校の児童生徒を対象に「DLA(はじめの一步)」の「語彙チェック」を実施した結果、小学部一年生は八五%、小学部二〜四年生は九五%を超える正答率、小学部五年生以上はほぼ一〇〇%に近い正答率となり、日本語の語彙は学年が上がるごとに高まっていることが分かる

りました。

しかし教師を対象としたアンケートや全体研修からは、「授業で理解できる語彙が少ないと感じる」「一度では指示を理解(聞き取る)ことができない児童生徒がいる」「上手に考えや思いを伝えられない場面が見られる」という例が報告されました。その一方で、「日本語力も中国語力も高い児童生徒も多い」というプラスの面も挙げられていました。

この実態を踏まえ、日本語の学習言語能力を向上させる学習活動を工夫するとともに、日中のバイリンガルの強みを生かすこともできる実践を目指すことにしました。

(2) 児童生徒の意識

児童生徒の意識についてアンケートを実施しました。その結果、次のような傾向が見られました。

- ・小学部低く中学年では成功体験が乏しいなどの理由により、うまくいかないと感じる。
- ・小学部中学年から学齢が高くなるにつれ、「表現・コミュニケーション」に対する苦手意識が高くなる。
- ・小学部中学年以上は、あきらめずに挑戦ができるたくましさや身につけていくものの、嫌なことを外に出さず自分の内面に秘めてしまう。そのため、自尊心や表現意欲を高める

る実践が必要だと考えました。

(3) 授業実践

児童生徒の実態を踏まえ、「在籍学級における日本語支援」「日本語で考えや思いを適切に伝える表現力の育成」「自尊感情の伸長」という視点から授業づくりをすることにしました。

○在籍学級における日本語支援

小学部一年における実践(単元名「くらべてよもう」教材名「じどう車くらべ」授業者・赤地由衣)の事例を報告します。

「『じごと』と『つくり』を捉えて書く」という国語科の目標と、「どんなクルマですか。」などの問いかけの言葉を使って話し合うという日本語の目標を設定しました。

はじめに児童は、はしご車の動画を見て、その「つくり」を付箋に書きました。それを活用して友人との共通点や相違点について話し合い、読み取りを深めていました。この「付箋に書く」というスモールステップを入れることで、日本語支援が必要な児童も自信を持って発表することができました。

また、読み取ったことを話し合ったり、ワークシートの表記を確かめ合ったりする活動では、「どんなしごとをしていますか。」「どんなつくりになっていますか。」「わたしもおな



小1 国語の授業でのペア学習
「同じところと違うところ」

じです。」などのモデル文を提示しました。これらのモデル文をたよりに、日本語で考えたことを伝え合う活動にも楽しそうに参加していました。

どの児童もこの活動を通して仕上げた「じどう車ずかん」を手に、誇らしげな笑顔を輝かせていました。

○日本語で考えや思いを適切に伝える表現力の育成

小学部四年(授業者・佐藤静子)では、リーフレットの作成をゴールとした授業実践をしました。

色分けしたカードを使って自分の意見や立場をはっきりと表現することにより、日本語支援が必要な児童生徒も分かりやすくなり、話し合い活動に参加することができました。

また、小学部六年(授業者・馬淵奈央人)では、「資源を大切に、よりよい未来にするために自分たちができること」というテーマについて、

節約・節電・節水・開発のキーワードを提示してグループピングや役割分担をした上で、自分達との相違点や類似点について色画用紙も活用して話し合い活動を充実させました。

中学部一年(授業者・北村雅俊)

では、総合的な学習の時間に「職業調べ・職場体験や中国と日本の働き方の比較を通して、自己の生き方を考える」というテーマに取り組みました。この学級は、五名のうち三名が国際結婚家庭であり、の中には日本語の学習言語能力に課題がある生徒もいます。

学習言語能力に課題がある生徒も、自分と関わりがある現地企業の「キヤノン大連」や「広タオル」の方々の講話から、自ら考え挑戦することや協調性の大切さを学びました。

この学びを生かして「好きなことに打ち込んで、楽しく豊かな人生を送る」という自身の理想とする生き方について、見事にPPTにまとめ発表することができました。

在大連の日本企業の方々からお話を聞いたり、日本と中国の文化・価値観の違いを考えたりすることを通して、特に国際結婚家庭の三名の生徒は、日本と中国の両方の良さを理解していることに自信を深めた様子が見られました。

(4) 自尊感情の伸長

小学部中学年以降に見られる「嫌なことを外に出さず自分の内面に秘めてしまう」という課題を克服するため、私達は「自分の考えや思いを適切に伝え、より良い人間関係を築く力」が、生涯にわたって良さを発揮することにつながると考えました。

そこで、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルのトレーニングを基盤とする「ピア・サポート(プログラム)」の活動を取り入れることにしました。中学部の特別活動では、実際にプラスのストロークの実践を行い、ほめることの難しさや大切さを学ばせることができました。

今後に向けて

視覚教材等を活用したり教師の指示や学習の留意点等を視覚化したりして、子どもの学習内容の理解を深める支援(理解支援)や、子どもの思考、感情、立場などを視覚化することによる交流活動や対話への支援(表現支援)をより一層充実させたいと考えています。

さらに、道徳の時間・特別活動も充実・工夫させて、自尊感情や表現意欲を高め、より良い人間関係を築けるような学習活動を追究していきたいと思えます。